

レポーター：学芸員の林さんです。よろしくお願い致します。

学芸員：よろしくお願い致します。

レポーター：この後ろにある遣唐使船は、実際にその当時日本から唐に向かった船の模型なんですよ。

学芸員：そうですね。長さがだいたい30メートル、幅が9メートルくらいですね。

レポーター：30メートルと聞くと、結構大きなもののように感じるんですけども、実際に、中国まで渡るとなると結構大変な旅ですよ。

学芸員：そうですね、東シナ海をこう渡っていきますので、外洋を航行するにはそのくらいの大きさがないとですね。瀬戸内海のような内海と違いますので、やっぱり30メートルくらいの規模がないとですね渡れないですね。

レポーター：そうなんですよ。実際に、今現在遣唐使船って残ってるんですか。

学芸員：残ってませんね。

レポーター：じゃあ、どうしてこうやって細かいところまで再現できてるんでしょうか。

学芸員：ずいぶんあとの鎌倉時代くらいになってからの絵巻物にですね、遣唐使船という形で出てくるんですね、そういうのを参考にして復元していくとこういう形になるということです。

レポーター：実際、この30メートルの船に何名くらいの船員の方が乗られていたんですか。

学芸員：あの、一隻にだいたい140名くらい乗っていたようですね。

レポーター：140名。結構、たくさん的人数乗られていたんですね。

学芸員：そうですね。リスクもありますので、だいたい4隻に分乗してですね、遣唐大使と副使は別々の船に乗るとかですね。

レポーター：あーそっか、危ないですもんね。同じ船に乗ってて、もしものことがあった時とかはですね。

学芸員：もしもの時がたくさんあってですね、まあ半分くらい難破するとかね、漂流するということになりますね。

レポーター：実際、どれくらいの日数がかかるんですか。

学芸員：まあ、博多をでて、それから、唐津とかですね呼子とか平戸とか五島まで、まあ、風待ちをしながら進んでいって、そして、五島のあたりから一気に東シナ海に渡って行くときには、そうですね、一日半とか二日ぐらいとかくらいで渡ってしまいますね。

レポーター：思ったより短い日数で進んでいくんですね。

学芸員：ええ。

レポーター：この遣唐使船はどういった動力で、風なんですよ、どういう風にして。

学芸員：ええ、あのこれ見てもらったらわかるんですけども、このここですね、斜めに竹を編んで作ったものですね。網代帆っていいですね。風が出てくると、この伸ばして行ってですね、パタパタパタッと伸ばして行ってこの帆を張る。風がない時はですね、あの船の側面に艀棚っていうのがあって艀を差し込んでですね船員が漕いで進む。そういう形になってますね。

レポーター：このとびでている部分に差して。

学芸員：そうですね。

レポーター：動かしていくんですね。実際、この遣唐使船どこで造られていたんですか。

学芸員：記録の上ではですね、瀬戸内海、広島なんかの倉橋島っていう島なんかで造られて、まあ試運転のかたちでですね、なにわ、大阪まで行ってそれから乗り込んで、瀬戸内海を西に行って、博多、で、鴻臚館で旅支度をしてそれから本格的にですね、中国に渡る、そういう様になってますね。有名な人ではですね、630年から838年までなんですけど、だいたい16回くらい派遣されてる。最澄とか空海とかですね、お坊さんが有名ですね。それから阿倍仲麻呂とかですね、吉備真備っていうまあ若い、あの役人ですね、唐の進んだ法律だとか仏教を学ぶためにまあでかけて行く。そういう人たちが有名ですよ。

レポーター：ふうーん。そうやって、中国で学んだ技術を日本に取り入れて、より良い国作りをしていくんだと。

学芸員：まあ、そうですね。

レポーター：ということですね。

学芸員：先進の技術だとか、法律だとかですね、芸術だとか文学だとかですね、宗教だとかっていうのを取り入れた、その元となっている船ですね。

レポーター：そうなんですね。ありがとうございました。

学芸員：はい。